



平成29年11月16日 cafe & gallery spoons にて

いわはら ゆうき  
**岩原 勇氣さん**

(NPO法人BRAHart. 理事長)

兵庫県出身。龍谷大学卒業後、びわこ学園に入職。二〇一三年に有志メンバーで決起。以降プロジェクト会議を重ね、二〇一四年九月にNPO法人化。「障害があるとうとなかろうと、好きなこと・得意なことを仕事にして精一杯生きる」をモットーに、活動を展開。二〇一五年に日中一時支援事業所 Yafas をオープンする。二〇一七年には生活介護事業所 office-cosiki-AJ cafe&gallery spoons が天津市唐橋にオープン。

## cafe&amp;gallery spoons

原田 新しくオープンしたcafe&gallery spoonsの建物のリノベーションは全部、皆さんでされたのですか。

岩原 全部ではなく塗装のみです。見積りが予算を大きくオーバーしたのと、塗装だけで予算が百万円を超えていたので、これを省きますかということになりました。足場だけ業者さんに組んでいただいて、BRAHARTのフェイスペインクのページで外壁を塗りませんかというのをイベントとして募集したら、金土日の三日間で延べ三十人ぐらい来てくださって、塗りました。ただ、それでは足りず、そこから一カ月ぐらい、僕と利用者さんのお父さん一人と、うちのスタッフ一人と、三人ですつと塗っていました。

北川 塗装で三十人集まるというのは、どんな方が来られたのですか。

岩原 たとえば、近くの建部大社さんで、毎月、朝市をやっているんですが、もともとそれは瀬田の商工会から始まっ

ていて、たまたま法人をつくる前に、いろいろなところで出店をしていたんですよ。雑貨を売ったり、バザー的なことをやったりということをしていました。その時にた

またま朝市に参加して、そこから毎月参加するようになって。その会議にも入らせてもらって、いろいろ発言している中で、出店者の会というところの事務局みたいなのをやらせてもらうようになりました。なので、その出店者の会に入ってくれているメンバーとかもちよろつと手伝いに来てくれたりとか、商売の合間に手伝いに来てくれたりだとか。他、養護学校の生徒さんのお母さんでうちの活動を気に入ってくれた人が手伝いに来てくれたりだとか、以前の仲間、びわこ学園のスタッフだったりとか、そこにあるNPO法人あめんど①さんの人とか、いろいろな人が手伝いに来てくれたんですね。完成までのべ百人ぐらいかかって、外壁と内壁を塗っていると思います。

北川 本当にみんなのでつくり上げたという感じですね。

岩原 そうそう。だから、ほんまにそう言ってくれていいしということも言っていて。本当に、ここは縁だけでやっ

①NPO法人あめんど・・・滋賀県大津市にあるNPO法人。「子育て支援」「発達支援」「学習支援」「英会話クラス」「各種文化教室」「教育セミナー」など、親子のための学び舎として活動している。

ているんです。だって、そもそもこの場所でやれるということ自体、その前のところが駄目になって、その直後ぐらいに「ここをやらないか」と話が来たんですけれども、それも瀬田の商工会の絆づくりプロジェクト(②)というのがあって、僕もそこに登録して生まれたいんです。その中の一人の自転車屋さんから連絡があって、このオーナーさんが自転車好きで、自転車屋さん「ここが空いているから、やらへんか」という声掛けがあったんです。そうしたら、自転車屋さんから「俺、今、無理やから、岩原君、やらへんか」という声がかかったんです。でも、オーナーさんもすごく思いが強い人で、自分が気に入った方ではないとやらしてくれないんですよ。ここは二十年ぐらい前までガソリンスタンドがありました。でもそれからずっと空いたまま、もう倉庫にしてはったんです。だから、誰もやってくれんでも良かった場所なんです。「そういうことをやるんやったら、ぜひ使ってくれ」と言っていただけで、たんです。本当にありがたい話でこれも縁ですね。だから、ここは、もうお金があってもそれだけではできない場所。

### B R A H " a r t .

原田 法人名の、B R A H " a r t . という名前には、どう

いう意味があるんですか。

岩原 名前を何にしようかとなった時に一緒に立ち上げたメンバーが案を持ってきたんです。ブラフマンというのは、仏教のまんたら、宇宙の成り立ちみたいなことです。アートマンというのは、一人の成り立ち。うちは宗教とか特別に関係ないんですけども、ミュージシャンの「B R A H M A N」のアルバムの名前が「A R T M A N」というのがあって、その二つが一緒だよという考え方が面白いよねと言って、「ブラフマンとアートマンか。マンは一緒だから、取ってしまえ」とイコールでつないだら、「B R A H " a r t .」になる。これはいいなというので決まりました。

北川 何か名前と考えがフィットしている感じがしますね。岩原 たまたまですけども。これはびっくりしましたね。これしかないという感じですよと決まったんです。

原田 私は a r t が小文字のところがいいなと思いました。個人的なものだという。

岩原 そうですね。よくアーティスト集団みたいな感じに勘違いされるんですけども、そういう意味ではなくて、一人の成り立ちと社会の成り立ちをつないでしまえば、一人の人を変えていくことによって社会全体が変わっていくのではないかという思いがあります。だから、「障害がある人の状況を他にいた時と変えてしまえ」と、そうすれば、

それがスタンダードになっていくのではないかという考え  
方です。ギャラリィをやっているからといって、ポーター  
レスアートギャラリィがやりたいわけではないし、まった  
く関係ないんです……。障害がある人の芸術活動を応援し  
ようという意味合いは一切ないです。そもそも芸術にポー  
ターなんてないと思っっているので、だからわざわざ言わな  
くてもいいのではないかという考えもあります。もちろん  
言ったからこそ今の活動があるから、本当にすごいですよ  
ね。ありがたいなと思っっています。その上で、そこからも  
う一度発火させて、みたいな。たぶん両方の動きやと思っ  
ます。

### そもそも地域の中にしかないものをつくろう

北川 BRAHmart. の構想自体は、いつぐらいから考  
えてこられたんですか。

岩原 本当にいろいろな人のおかげでこの構想は出来上がっ  
ています。びわこ学園に入職した当時からもともと独立し

②絆づくりプロジェクト・・・少子高齢化問題への対策のひとつとして、高齢者  
にとって住みよい街づくりを目指した様々な地域貢献活動を行うことを目的とし

たいと言うて、めっちゃめっちゃ学ばしてもらいました。重度  
の人のことも、軽度の自閉傾向の強い人も、精神障害の人  
も、いろいろな人に会わせてもらって、いろいろな能力は  
あるんやけれども、施設の中ではうまく生かすきれない人  
をたくさん見てきた。その中ではなかなかやりきれへん  
と思っただけを、どうやったらできるかという方向に頭を持っ  
ていったんです。びわこ学園で制度の厳しさということも  
感じつつ、一方で、びわこ学園で優遇されていることも感  
じつつ、やはりつくらなアカンと思っ、つくりました。  
実際に動き始めてから法人を立てるまでは三年ぐらいです。  
北川 何か新しいことをやろうと思っただけに、いろいろな  
障壁みたいなものはなかったんですか。そうやって新しい  
ことをやりたいと思っっている人が結構たくさんいる中で、  
それを形にしていくところはできない人、多いんじゃない  
かなと思っのですが。

岩原 直接的な支援の方法では揉めたことはいっぱいある  
んですが、地域で展開するということで揉めたことはなかっ  
たですね。これはちよつと面白かったです。やり方のとこ

て、瀬田商工会を中心とした周辺地域の商工業者やボランティアの面々がメン  
バーを募り発足。

ろで相談みたいなのはいっぱいありましたけれども。

北川 それに気付いて提案できるのかどうかというのも大きいですよ。

岩原 やはり、尾賀商店③でイベントをやった後から、どんどん外の人達（福祉以外）とのつながりが多くなってきたので、それは大きかったですね。だから、もともとなかった発想というのが、外の人のおかげでどんどん開かされていったのだと思います。

僕、すごいなと思ったのが、びわこ学園を辞める前に「施設は地域である」みたいなテーマで実践報告をしたんです。それで、たいよう④という施設を実質的につくった、その当時通所課長をしていた人にどういう経緯でつくったかとか、土地が守山に決まった経緯とかその辺全部、どうやっていたかという話を聞いたのです。その時に、その人が「僕は、施設は地域の宝やと思ってんねん。そもそも地域と施設を分けている時点でおかしいと思っていて」と言わはったんですよ。「すごいな、こんな人が近くにいたのか」と思っただけ。そもそも自分の中でも分けていなくて、もう何かつくるといふことはこの辺で決まっちゃいましたね。野洲のびわこ学園は地域交流棟という建物があるんですけども、「地域交流」という言葉自体が変ではないかみたいな話をよくしていたんです。そもそも分けるべきではない

よね、というような話を。元々そういう思いでつくったのではないと思いますよ。ですが、その言葉が福祉側から出ること自体がやはり変だなと思っていました。働いている側がそう思ってしまったところがあるなと思っ  
ていて……。障害がある人に対する偏った見方だったり、すぐ僕の中にもあったし、支援の対象としてしか障害のある人を見られない人もたくさんいました。でも、その前に単なる一人の人間同士というところを大事にしたいなという風に思いました。なので、もうそもそも地域の中にかないものをつくらうみたいな、そういう発想はすぐありましたね。地域ありきでしか事業展開しないところをつくりたい。うちで請け負っている仕事は、ほんまにこの地域のためにみたいなことしかやっていないです。たとえば、うちの利用者のAさんは、この地域の子ども達の学習支援や、子ども食堂のアドバイザーをしています。ここのカフェのギャラリイも、人が集まれる場所をつくりたいというところで、単なる儲けのカフェではなくて、コミュニティカフェのイメージです。他のいろいろな地域団体にも僕らが加盟していることによって、地域の人々がちゃんと集まれる場所にしたいと思っています。

北川 二月にあるアメニティーフォーラム22⑤のプロ  
グラムの一つに就労継続支援C型というのがあってもいい

のではないかみたいなの話があるようです。

岩原 それは何ですか。

北川 C型というのは、コミュニティのC。地域を支える事業をやっている。だから、工賃とかではなくて、それを支えることがそもそも皆さんの存在価値だよみたいなところをやっている事業が全国に実はたくさんあって、まさにBRAHart.がやっているのがC型かもしれないですね。

岩原 それしかやる気がないです。めっちゃ面白いじゃないですか。

北川 見ているベクトルがみんな、地域を向いているんでしょうね。利用者の方も、スタッフの方も。

岩原 僕がずっと言っているからかもしれないですけど、でも、だからお金にならないですよみたいな(笑)。大変やなと思いますよ。何に時間を割いているんやろみたいな、お金にならない仕事をいっぱいしてましたよ。瀬田の朝市の事務局では、メール一斉配信だけで四十件、ファクスで十件ぐらい流し、それをとりまとめ、レジュメを

作って、当日の仕切りまでやって、当初は無償でした。でも、それを三、四年間ぐらい今までやってきて、店舗が増えてきたし、お金を取ってもええよという話につながりました。今年、一応利用者となっていてる人に朝市のホームページとフェイスブックページを更新してもらおう作業を月額三千円付けてもらって、やっとそこでお金が入ってくるようになりました。やり続けていたら、ちゃんと見てくれる人がいるのが嬉しかったです。

### つながる感覚

北川 人のつながりがすごいですね。

岩原 これは、本当に実習(社会福祉士)のおかげかもしれないです。ちょうど自立支援法が始まる時やって、自立というテーマで、見学に行っただけです。でも、単なる字面だけの自立ではこの方達には無理だと思ったんです。自立支援法なんていう言葉が、今後どうなるんだみたいに思っただけです。

③尾賀商店・・・滋賀県近江八幡市にあるお店。築百五十年の古民家で、現在はカフェを営業中。

④たいよう・・・社会福祉法人びわこ学園が運営する障害者支援センター。

⑤アメニティーフォーラム22・・・障害者の地域生活を推進していくための全国的なネットワークを作ることを目指す、毎年二月に滋賀県大津市のびわ湖大津プリンスホテルで開催。二〇一八年二月に二十二回目を迎えた。

でもよう考えたら、自分達も生活がどうやって成り立っているかみたいな話になった時に、いろいろな人の力を借りながら生きていくというところに行き着いたのが実習でした。障害がある人であっても、何であっても、僕はその人の好きなところやすごいところを一個だけ見つけたら、そこだけではつながっていられる。そこから変わってきた。一回つながった人とは切れないですね。すると、何年かぶりとかに会える。

原田 お話を聞いていて、周りの人のおかげとか縁があったとか、すごいとか、それをキャッチできる岩原さんのその感受性もそうだし、それをずっとつなげて、ここまで実現する力みたいなのをものすごく感じました。

岩原 でも本当に、出会った利用者さん達のおかげやなと思いますね。さくらはうす(⑥)で、当時お付き合いしている方と別れた時に、本当にもうその日、一切働く気がなかったんです。次の日、一応、出勤したんですけども、何かもうええわと思って。そうしたら、普段、手を引つ張らんと全然動いてくれない利用者さんが僕の手を引いて畑に行った。「すごい！こんなことがあるんや」と思いました。自閉傾向も強い方だったので、普段やっている動きとか、「ここに行くんやろ。ほな、はよ行こうや」というつながりだったかもしれへんけども、そのタイミングでいろいろ気

付かされて、自分がこだわっていたこととか気にしていたことは別にどうでもええなと思いはじめました。

滋賀県は、もうすごい人ばかりおられるじゃないですか。そんな人達がいたら、隙間産的にやっていないところに入るしかないです。でも、国内で探したら、カフェだって、ギャラリーだって、生活介護の事業所だって、日中一時の事業所だって、どこにでもあるじゃないですか。何も新しいことはない。単に人のつながりというか、組み合わせているだけ。

北川 きつとその感覚ですよ。何かこの地域の中で、ここが隙間で、ここが必要だから組み合わせさせてやっていくセンスというのは、なかなかそこにいないと分からないところもあると思います。

岩原 そうかもしれないです。何か意外に難しいなと思っただけで、角度を変えるだけで出来たりする。自分のコネクターみたいなものをできるだけ柔らかくしておくことを常に考えながら、出会った人のこちら側とあちら側はいがみ合っていたとしても、真ん中にあることによって、この二人の力を生かせんかなと。で、常にいるようにしよう。つないでいく感覚は、福祉業界の人どうこうではないですね。どちらかというところ、もう尾賀商店の人達とかやと思います。驚くほど人とのつながりを持ってはって、本

当にすごいんですよ。だから、その人がつなげてくれたことによつて、僕自身の考え方もだいぶ変わった。

### お互いwin-winで

利用者という立場をとってこれているだけ

岩原 以前、一回、普段利用者としていて人と、普段スタッフとしていて人が完全にフラットで飲みましようという会を瀬田のところで作ったことがあります。いろいろな事業所の若い子を集めて、まちかどプロジェクト(⑦)の人とかも一緒に飲んだんです。

今、一人暮らしをしてはる人はたくさんいるじゃないですか。ですけど、福祉サービスのなかだけで生活を組み立てている人も多いです。作業所に行く。行って帰ってくる。ヘルパーさんが待っていて、ご飯を食べて、お風呂に入つて、寝る。次の日の朝、ヘルパーさんが来て、事業所に行つて、帰ってきて、同じ生活が続くんです。何で一人暮らしをしているのかが分からない。そこから先に一人暮らしの

意味があると思うんです。

うちに瀬田駅前でも一人暮らしをしているMさんがいるんですけども。その方はヘルパーをヘルパーではない時間帯に誘つて、駅へ飲みに行くんです。そのヘルプの事業所自体がそれを許している事業所なんですね。そうすると、その辺のボーダーがあまりないと。普段スタッフとして働いているんやけれども、プライベートで障害がある人として働いているから、何か分からないんですよ。単なる役割分担でしかなくて、単なる一人の人間でしかないから、単なる利用者としてそこにいるだけ。単なるスタッフとしてそこにいるだけ。人と人としてというところは変わりが無い。

だけど今、スタッフの中で働いている人達は、支援者としてしか自分を見られなくなってきたんですよ。自分達は障害のある人達を支援する存在で、障害者は支援が必要で存在としか見ていない。ある一定のラインは必要やと思いますけれども、それってめっちゃもったいない。だから、そこでプライベートの関わりがあつてもいいような気がします。

⑥ さくらハウス・・・社会福祉法人びわこ学園が運営する生活介護事業所。十八歳以上の大津市在住の知的障害者の方が対象。

⑦ まちかどプロジェクト・・・社会福祉法人共生シンフォニーが運営する就労継続支援B型事業所。

よく当事者の運動を続けてきた人達は「こんな社会がつくりたかったわけではないのだ」と嘆かはる。制度をつくったら、今、協力してくれている人達にお金が入ると。そうやってお金が入ったら、安定して自分達の生活もつくっていきけるし、この人達の生活も潤うという純粋な思いでやってきたところが本来あったのに、職員と利用者になることによって、完全にプライベートのところがなくなります。僕らみたいなのは単に役割分担で、そこにいて、そういうバランスで成り立っている人達というのがいてもいいのではないかなと思っっています。それを増やしていきたいのかかと。時代の流れに逆行しているかもしれないですけれども。

北川 きつと楽しいですよ。利用者と支援者という関係だとできないことばかりですね。

岩原 そうなんです。障害があることによつて、僕よりいろいろなつながりを持っていますよね。と考えた時、守られるべき存在ではないよねみたいな。全然、得している面もいっぱいある。こんなこと、言葉だけを捉えると、たぶんめっちゃ怒られるから、あれですけれども、でも、守られるべき存在、お金を取らんでもいい存在とか、そうい

うことではないよねとは思っています。そうではなくて、ちゃんと周りの人達に対して、その人ができることで力になっていく。そういう事業展開しか考えたくないな。ここに来て、誰がこの店の仕入れを担っているかとか、あまり考えないではないですか。ちなみに仕入れは僕と利用者さんと二人で行っているんです。例えば、ウェイターとして立つてもらおうとか一切思っていないです。無理やり感のある扱いは絶対に嫌。職業訓練的なものも嫌だなと。別に向いているなと思つて、そのレベルに高めるために練習をするというのは全然ありやと思うのですけれども、向いていない人を、その仕事がどこかにあるから、そこに向けて訓練をしていくというのはちよつとしたくない。僕以上に人付き合いがうまくて、ウェイターとして、こいつはもうすごい素質を持っているなという障害がある人が来たら、ぜひとも雇わせてくださいと頼むだけの話ですね。そんなイメージです。だから、いろいろなところに、障害のある人が働くカフェとかありますけれども、うちはそういう形では全然思っていないで、でも、裏でちゃんと働いてホームページをいじってくれていたりとか、仕入れを手伝ってくれていたりという感じ。本当にみんな、そういう同じ土俵でいいと思っています。

岩原さんのお話をうかがって

岩原さんへのインタビューは、瀬田にオープンしたばかりの cafe&gallery spoons にて取材させていただきました。紙幅の都合でインタビューには載せられませんでした。提供している料理に対しても熱く語っていただきました。とても希少な「瀬田シジミ」や、琵琶湖の魚「ゴリ」などを使用しているランチは、見た目も華やかで美味しかったです。食後には岩原さんのオリジナルでブレンドしてもらったというコーヒーをいただきました。そして、ふと窓の外に目線移すと、屋根の下にはさりげなくクリスマスMASの置物が……！（取材は十一月一六日）カフェの至る所にこだわりと遊

び心を感じることができたのでした。

しかし、それは決して表面的なお金儲けのオシャレではありません。「つながり」や「縁」という言葉がキーワードのようにお話のなかで何度も出ていきましたが、インタビュー中に話題にしている人物が、その直後にその場に現れるという奇跡が二回も起こったのです。これは、私には偶然だとは思えません。人を惹き寄せる岩原さんの才能、とも言えそうです。その根底には人に接する時の岩原さんのぶれな姿勢があるのだらうなと思いました。また、その信念を実際にかたちにしていく姿にも刺激を受けました。（原田）